

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 13 日現在

機関番号：32615

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2015

課題番号：24520648

研究課題名(和文) 自律学習者(学習者オートノミー)を育成する英語教育プログラムの研究と実践

研究課題名(英文) Fostering Autonomy through an English Language Curriculum: A Case Study at Higher Education in Japan

研究代表者

宮原 万寿子(MIYAHARA, Masuko)

国際基督教大学・教養学部・講師

研究者番号：00453556

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,800,000円

研究成果の概要(和文)：外国語学習とは断片的な能力の獲得にとどまらず、全人格的な成長に繋がる過程であるという考え方へ変わりいく中で、学習者とその学びの過程に深く関わる学習者オートノミーの研究に、大きな関心が寄せられている。しかし、学習者オートノミーの概念自体は定着しつつあるもその定義や特徴、さらに自律学習の指導のあり方についての具体的方法は国内外を問わず広まっていない。本研究は国際基督教大学のリベラルアーツ英語プログラム(English for Liberal Arts/ELA)において、学習者オートノミーの育成を目標としたカリキュラム作成、教材開発、授業活動の考案と、その導入法を探ることを目的とした。

研究成果の概要(英文)：The overriding research question of this study is to examine how autonomy can be fostered and developed in an institutionalized setting of a formal classroom at higher education in Japan. We attempted to explore the subject from three directions: the curriculum, materials and resources, and from a slightly different level, the collaborative efforts among learners. Taking a qualitative approach to address the research question, three dominant themes emerged from the analysis of the data: 1) changes in learners' perception of learning English, 2) transformation of their views as learners or users of English, and as a result of such mindset, 3) the creation of a real or virtual 'space' for learning. These factors appear to intricately intertwine in the process of developing learners' autonomous attitude towards their own learning.

研究分野：Language Learning Research外国語教育

キーワード：第二言語習得 カリキュラム オートノミー 外国語教育 質的研究 自律学習者 教材 協働/協同学習

1. 研究開始当初の背景

学習者オートノミーの一般的な定義はフランスの Centre de Recherches et d'Applications en Langues(CRAPEL)のオレック(Henri Holec)が1981年に提唱した「自分の学習に責任を持つ能力」(“the ability to take charge of one's own learning experience” Holec, 1981:3)である。オレックは「学習に責任をもつ」とは学習者自身が自己の学習の目的、方法を定め、教材を選択し、学習方法を決定し、学習過程のモニタリング、さらに、到達度を評価することであると説明している。すなわち、学習者自身が自己の学びに対して主体的に取り組むという考え方である。しかし、従来の教育現場で一般的である「教師による指導中心」とは異なる発想であることから、一部の教育者からは懸念の声があがった。本研究では共通プログラムの中、実際にどのように学習者オートノミーが育つのか、それを明確にしようと考えた。

2. 研究の目的

国際基督教大学の英語教育プログラムにおいて英語運用能力向上、及び、学習者オートノミー育成を目指したカリキュラム開発、及び、その実践研究である。特に学習者オートノミー発達へとつながるカリキュラム、教材、学習活動を吟味し、学習者オートノミーの発達の過程を考察することが目的である。

3. 研究の方法

本研究では国際基督教大学英語教育課程で学ぶ学習者のオートノミー発達の過程をカリキュラム、学習者間の協同/協働、教材の三点から明らかにすることが目的である。そのため研究計画としてカリキュラムのコース、学習者間の協同/協働を促す授業活動、学習者のオートノミーを促す教材、其々三点の開発、実施、検証をグループに分かれて遂行した。オートノミー発達の記録・分析の方法としてポートフォリオ、インタビュー、フォーカスグループを用い、ICレコーダー、デジタルカメラにより録音、録画する方法を用いた。これらはデータ収集法であると共に、学生の振り返りを促し、自己の英語習熟度、学習に対する客観的な視点を養う方法でもある。平成24年度は新カリキュラム始動年にあたり、新カリキュラムで学ぶ一年生を一年間集中的、段階的、長期的に追う良い機会でもあった。平成25年度は二年次のカリキュラムにおける彼らの成長過程を調査すると共に、平成25年度に入学する新一年生のオートノミーの発達過程を観察した。

研究計画・方法(平成24年度)

カリキュラムのコースの開発、実施、検証。本課程のカリキュラムは、英語運用能力強化とオートノミー発達を目的に、全てのコースの有機的相互作用を念頭に編成されている。カリキュラムの核となる「読解と論文作法」と「精読と英文構成法」をスキル面で補うのが「アカデミック・スキルズ」であり、この三コースが、それぞれ教員主導の指導から学習者主導による自律した学習を促す実践の場となる。「アカデミック・スキルズ」で各学生が自己の英語熟達度の把握、自己に適した学習方法や教材選定、学習計画の作成といった、自己の学習に責任を持つ学習者へと成長していく過程を支援するために、三種類のコースの連動、連携を行う。

自律学習を促進する協同/協働作業の開発、実施、検証。学習における共同体の重要性(佐藤2006)、学習者中心の活動(Richards and Rogers 2001)は言語学習においてもその有効性は広く認識されている。教師中心の活動から学生間の協同/協働作業を中心とする授業活動へ移行することにより、他の学習者への責任性を意識することで、より自律した学習者へと成長することを目的とする開発、実施を目指した。

学習者オートノミーを促す教材。

学習者オートノミーの発達には、学習者の内省が重要とされている(Little 2004)。コースで使用する英語教材に加えて、学習者が自己の学習を計画、実践、観察、評価をできるようポートフォリオ導入等を計画する。また学習者の「足場掛け」(scaffolding)となるような教材導入も行った。

4月にTOEFL(ITP)による英語力測定(全学生対象)。研究参加希望者を募り、参加希望者を対象に英語学習履歴調査、インタビュー、フォーカスグループを実施。その後、一年次終了まで毎月1回のインタビュー、隔週のポートフォリオ提出、学期1回のフォーカスグループを実施。冬学期(2月)にTOEFL(ITP)による英語力測定(全学生対象)。一年次生の統括としてインタビュー、フォーカスグループを実施。データ分析を行った。

研究計画・方法(平成25年度)

二年次のカリキュラム。

2年間に亘るカリキュラムを締め括る「論文作成」ではトピック選定、文献検索と収集、論文推敲を経ての英語での研究論文執筆を目的とする。このコースを履修するにあたり、一年次に学んだ学習内容・スキルを復習し、

「論文作成」への橋渡しをする目的で設けられたのが「論文作成基礎」である。4月より毎月1回のインタビュー、隔週のポートフォリオ提出、学期1回のフォーカスグループ秋学期に研究終了の統括としてインタビュー、フォーカスグループを実施すると共に、ポートフォリオの振り返りを行った。さらに、平成24年度の新入生と同じ方法で平成25年度の新入生を追う。研究者はデータ分析を行った。

研究計画・方法(平成26年)

平成24年度の二年次生と同じ方法で平成25年度の二年次生の英語学習体験及び学習者オートノミー発達を追い、データ分析を行った。

4. 研究成果

データから浮かびあがってきた概念の中から学習者オートノミーに強く関連している3つの概念にフォーカスし、考察した結果、英語に対する意識の変化、英語使用者としての意識、そしてspace(場)という概念が大きくかかわっていることが分かった。

英語に対する意識の変化：

参加者はもはやテストの点数や順位を気にかける様子は見られない。代わりに、プレゼンテーションで用いる言葉の選択や、論文の構成など、相手により正確に理解してもらうためにはどのように表現すればよいのかを模索している様子が伺える。つまり、研究参加者にとって英語が、高得点を取得する(したい)『科目』から『コミュニケーションの手段』に変化していることが、面談を通して明らかになった。そのため、自ら自発的にその目的に向かう姿勢がうかがえた。

英語使用者としての意識：

英語使用者としての意識の変遷をたどることができた参加者と、最後の面談までその変化は目立ってでてこなかった参加者がいた。その理由の一つにはGibson(1979)の言うところのaffordancesという概念で説明がつく。

space(場)の概念：

「場」(Space)という概念が自律学習に関するテーマとして読み取れた。複数の研究参加者が、自律及び自立を「環境」「機会」「きっかけ」「場所」等の言葉で表現している。これらの3つの概念は学習者オートノミーとは個人的側面以外に社会的な側面が多いにあり、様々な要因との相互作用、意味の交渉、協働により形成される(Benson 2001, 2002; Sinclair, 2000)。さらに常に変化を遂げていることも大きな特徴である(Sinclair 2000)と言えよう。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 0 件)

〔学会発表〕(計 4 件)

JACET International Conference 2015, August 29-31, 2015 (Kagoshima University, Japan)

Title: *Learner autonomy and the curriculum: Collaborative Dialogue between people, resources and practices at higher education*

Presenters: Akiko Fukao, Atsuko Watanabe, Izumi Watanabe-Kim., and Masuko Miyahara

AILA World Congress 2014, August 10-15, 2014 (Brisbane, Australia)

Title: *Learner autonomy and the curriculum: Collaborative people, resources and practices at higher education*

Presenters: Izumi Watanabe-Kim and Masuko Miyahara

JALT LD SIG 20th Anniversary Conference, November 23rd, 2013, Gakushuin University (Tokyo, Japan)

Title: *At the Crossroad of Theory and Practice: Fostering Learner Autonomy at ICU*

Presenters: Izumi Watanabe-Kim and Masuko Miyahara

JALT Annual International Conference, October 25-28, 2013 (Kobe, Japan)

Title: *Fostering Learner Autonomy at Japanese Higher Education*

Presenters: Atsuko Tsuda and Masuko Miyahara

〔図書〕(計 1 件)

「自律学習者(学習者オートノミー)を育成する英語教育プログラムの研究と実践」宮原万寿子、深尾暁子、渡辺敦子、渡辺泉、津田敦子(共著) 自費出版、2016年

〔その他〕

施設見学

見学先: 神田外語大学セルフアクセスセンター(SALC) 日時: 2012年6月28日。

見学者: 渡邊(金)泉、宮原万寿子 講習会

講師: 青木直子先生 (大阪大学大学院)

日時：2013年11月17日
場所：ICU, Dialogue House (202 会議室)
参加者：深尾暁子、津田敦子、渡邊(金)泉、
宮原万寿子。

招聘

講演会：第3回英語教育における質的コンソ
ーシウム、

日時：2016年3月12日

場所：東洋英和女子大学

講演者：玉井 健(神戸市外国語大学・教授)

題：「実践者による質的英語教育 Reflective
practice をめぐる理論と方法、その問題点」

講演者：Robert Crocker (南山大学・教授)

題：Doing Ethical Qualitative Research

6. 研究組織

(1) 研究代表者

宮原万寿子 (MIYAHARA, Masuko)

国際基督教大学・教養学部・講師

研究者番号：00453556

(2) 研究分担者

深尾暁子 (FUKAO, Akiko)

国際基督教大学・教養学部・講師

研究者番号：30286679

渡辺敦子 (WATANABE, Atsuko)

国際基督教大学・教養学部・講師

研究者番号：70296797

渡邊(金)泉 (WATANABE, Kim Izumi)

国際基督教大学・教養学部・講師

研究者番号：40365523

津田敦子 (TSUDA, Atsuko)

立教大学・ランゲージセンター・

教育講師

研究者番号：70308039